

日銀支店長が語る

経済よもやま話

第5回 百聞は一見にしかず



日本銀行仙台支店長 岡山 和裕

気仙沼での講演

私は仕事柄講演にお呼びいただくことが多い。4月下旬に着任してから1カ月しか経過していない5月下旬に気仙沼商工会議所にお呼びいただき、講演することになった。

気仙沼にはそれまでお邪魔したことがなかった。でも、私が日銀本店で一般広報の仕事を担当し、東日本大震災から6年が経過した年に、日銀の一般広報誌で気仙沼市を特集させてもらっていた。その6年後に実際に気仙沼で講演させてもらうことに、不思議なご縁を感じていた。

私は講演をする時、極力、その地域の話題をお話するようにしている。

でも、講演は着任1カ月後。私は、とにかく様々な媒体や機会を使って、気仙沼の情報をできるだけ集めた。そして、講演では10個の話題をご披露した。

こうした話題は、地元の方にとっては当たり前のことなのだが、講演後に「短期間によく調べていただきましたね」とお褒めの言葉をいただいた。

また、講演を行う前には、市内の案内、被災状況やそこからの復興状況などを詳しくご説明いただいた。その日は、とても天気の良い日だったので、目の前にあるのどかな景色と、これまでテレビなどで見ていた被災時の映像とが、全く一致しなかった。これまでのお取り組みにただ頭が下がる思いだった。

これだけではなかった。気仙沼商工会議所では、人口減少への危機感から、地元でアンケートを取ったうえで、約半年で、①行政と連携する分野、②経済活動分野、③20年後のまちづくり分野に分けて、具体的な対応方針を提案しておられた。

また、観光推進についても「気仙沼クルーカード」（気仙沼の旬のおすすめ情報や観光スポットなど、最新情報が入手できるアプリ）を導入し、

そのデータに基づくマーケティングも行われていた。こうした取り組みもあり、昨年の段階で宿泊する観光客数がコロナ前の水準まで戻しておられた。このような取り組みは、本当に素晴らしいと思った。

ところで、気仙沼にはご縁を感じていたのだが、その理由はこれまで分からなかった。ところが、今回話題を集めていたら、その理由が何となく分かったような気がした。

話題の中で取り上げた森進一のヒット曲「港町ブルース」の発売時期を見てみると、何と1969年4月だったらしい。その時期は、私が母親のお腹の中にいた時であり、おそらく母親も当時の流行歌である港町ブルースを聞いていたに違いない。そうしたことから、不思議なご縁をいただいたような気がした。

そして、港町ブルースは1番から6番まであるのだが、今回気仙沼にお邪魔して、何と歌に出てくる港町のすべてを制覇できたのだ。これも奇遇ではないかと思った。

こうしたことを経験して思ったのは、やはり「百聞は一見にしかず」。ニュースや本で知ることに意味があるが、その場所について、三次元の経験をして、その土地の雰囲気、空気感を知ることの方が、さらに大事だと思った。

岡山 和裕氏 プロフィール

1969年（昭和44年）生まれ
兵庫県出身。本店15部署のうち8部署を経験したオールラウンダー。東日本大震災では、金融機構局で被災金融機関との連携役を担ったほか、熊本地震では決済機構局業務継続企画課長として現場を指揮。前橋支店長、業務局参事役等を経て、仙台支店長に就任